

Ja-Net

October 2019 No. 91

季刊ジャネット

Ja-Net は Japanese Network の略です。「にほんご」を通して編集室と読者の皆様を結ぶ情報誌にしたいと考えています。

Contents 目次

2019年10月25日発行

- View from the Other Side 3
ボンクジョビ セナさん(ガーナ)
- あちこち日本語ご紹介〈国内編〉..... 4
青森県 八戸市
- あちこち日本語ご紹介〈海外編〉..... 5
バングラデシュ ダッカ
- 教材紹介 6
『外国人生徒のための教科につなげる日本語 基礎編』
『日本語文法演習 ことがらの関係を表す表現—複文—改訂版』
『小説 ミラーさん II—みんなの日本語初級シリーズ—』
- なんでも情報 BOX..... 8

スリーエーネットワーク

巻頭 寄稿

世界から日本へ、日本から世界へ —新たな時代への希望と課題—



京都精華大学 学長 マリ共和国出身

ウスビ・サコ

21世紀を迎えて以降、日本の立ち位置に懸念を抱く人々が国内のみならず海外でも増えてきています。国家や地域などが織りなす複雑な関係において、日本はリーダー的な役割を果たすのか、あるいは世界のなりゆきを傍観するだけなのか、「強者」の一員として世界の不均質化に手を貸すのか、あるいは「弱者」の味方として平等で幸福度の高い世界の形成に一役買うのか。独自の文化を重んじながら、国民国家の枠組みの中で物事の決定プロセスを維持しようとする数少ない国の一つとして、今日のグローバル化に対するその姿勢とそこに内包される多様性に世界の関心が寄せられています。日本が国際社会の中で国益を重視しようとする姿勢を強めている一方で、この「国益」が場合によっては経済的な優位性のみを意味しているように見受けられることもあります。世界は技術革新、グローバル化、多様性の新しい時代を迎えましたが、人間の未来に対する不安は尽きません。そうしたなか、日本が独り歩きせずに向かうべき道筋と課題を中心に考えてみたいと思います。

世界から見る日本のイメージ

長年、海外の人々が日本について抱くイメージは幻想的で現実味を持たないものだったように思います。ジャポニズムにも見られるように、日本文化を典型的に示すようなヒト、モノ、行動を美化しすぎるあまり、自国の言語表現や行動規範にも日本文化を借用するということが起こっています。例えば、「zen」はフランス語表現において落ち着いた雰囲気や秩序立った状況を意味するようになり、「kamikaze」はチャレンジャーやその挑戦的な態度を表す言葉になっています。自分自身と向き合い、自己をコントロールする日本の武道・武術が紹介され、豆腐や魚中心の日本食や日本茶が健康維持によいと喧伝されたこともあって、世界中で「日本的」なものが身体的のみならず精神的な安定に貢献すると高く評価されるようになっていくようです。こうした日本文化への期待や憧れには旧態依然としたオリエンタリズムを見て取ることもできるでしょう。だとしても西洋から日本に寄せられる期待は思いのほか大きく、かつての「浮世絵」や琳派の意匠、黒澤

明や小津安二郎らの日本映画のみならず、現代のマンガ、アニメ、様々なキャラクター、J-POP、コスプレといったポピュラーカルチャーまでが憧れの対象となっています。しかも、こうした日本の文化全般への憧れや期待は、今日、遠くアフリカにまで浸透しています。海外から寄せられる期待に応えるかのように、日本政府もまた、クールジャパンをはじめ、国外の人々が消費しやすい大衆文化を奨励する制度を国策として整備してきました。

京都を見てみましょう。多くの観光客が京都に期待する、あるいは京都と聞いてイメージするのは、着物、舞妓、社寺仏閣、豆腐、抹茶などでしょう。観光地を訪れれば、土産物が期待通りに大量に並んでいます。本物京都か「偽京都」かに関係なく、京都のイメージがこうした「外からの期待に応えるかたち」で形成されているのは紛れもない事実です。

国際社会における日本の立場

日本人には、常に相手が何を自分たちに

期待しているか、それにどのように応えるかを気にしすぎるところがあります。日本の国際政策も、自身がリーダーシップをとるよりも他との関係を考慮して実施されることが多いように思われます。先日、横浜で開催された第7回アフリカ開発会議(TICAD)でも、発表されたアフリカ政策すべてにおいて、日本は中国のやり方に対抗して誠実な協力体制を構築しようとするのだという意識が窺えました。他方で日本政府はこれまでもアフリカ諸国からの期待に応えるため、様々なプロジェクトとそのための予算を準備してきました。ただ、日本社会にそれが浸透せず、結果として達成されることのなかった目標が散見されます。

日本は他国に対して何を求めているのかをはっきりと伝えることが必要です。日本は国際社会や様々な国に対する無償援助をはじめ、様々な支援を行ってきましたが、それらが日本にとってどのような利益をもたらすのか、それによって日本はどういったリーダーシップを発揮したいのかが明確に伝えられることはありませんでした。その点では日本とアフリカ諸国との関係も不明確なままであるように思われます。アフリカには国連加盟国が54カ国もあり、これらの国々は、国際的なイベントの日本誘致や国連の様々な機関における日本の地位向上に貢献してきました。ただ、そうした貢献はすべて暗黙の了解のもとになされてきました。

日本の高齢者をアフリカへ

次に日本の今後の姿を少し想像してみたいと思います。おそらく少子化と高齢化の傾向が止むことはないでしょう。それに伴って、地方の過疎化と都市部の空洞化がますます進行します。そこでは人生100年構想のもとで高齢者の積極的な雇用や地域コミュニティへの参加が課題になってくるでしょう。老後をどう生きるかは個人の問題です。とはいえ退職して高齢者になった自分の生き方をイメージできる人は少ないのではないのでしょうか。マリのドゴン族のように、一定の年齢(60歳)を迎えると地域の相談役となつて、コミュニティの重要事項の決定に参加する地位が与えられるといった社会システムは日本にはありません。現代の日本社会では高齢者はいまだに人口比率の割にマージナルな存在のままですが、やがて敬老の日の対象者も増えてくれれば、彼らを特別扱いするこ



フィールドワークで訪れた京都の老舗「麴嘉」の店主と。右からサコ学長、人文学部の学生

とはますます困難になるでしょう。

そこで、日本の高齢者を各分野の専門家として発展途上国に派遣することを提案してみたいと思います。2050年に世界の総人口は100億人を突破します。アフリカについて言えば、その人口は爆発的な増加によって25億人を超えると予測されています。

他方で、2050年の日本の総人口は9,700万人にまで減少し、高齢化率は40%近くに増加すると推計されています。今後の日本とアフリカ諸国の関係にとって、この高齢者が有する経験や専門知は極めて重要です。しかしながらTICAD等の会議では、未来の巨大マーケットであるアフリカにおいて、中国政府とその関連企業が多額の投資をしているのに対して日本の企業は出遅れており、アフリカで活躍する日本人は現段階で中国人の1/100に過ぎないとも指摘されています。日本政府も遅ればせながらアフリカへの多額の投資を計画していますが、その実施に際してアフリカの若者を教育するために日本の高齢者が専門家となってアフリカに移住するとしたら、それは日本とアフリカ双方にとっての希望となるのではないのでしょうか。社会インフラや技術インフラの不足にも関わらず、近年のアフリカの若い世代には高いスタートアップとアントレプレナーシップのポテンシャルが備わっています。日本の高齢者がアフリカの土地で、新たな文化交流を体験しつつ、自らの経験や専門知を現地の若い世代に伝達することによって、生きがいを感じられる老後を過ごすことができるでしょ

う。しばしば日本の若い世代は海外に飛び出すことに消極的だと言われますが、多くの日本の高齢者が海外で充実した第三の人生を過ごしている姿は、高齢者の再雇用問題の解決や日本の国際貢献といっただけでなく、こうした若者たちを鼓舞することにもつながるでしょう。

日本がこれから世界に対して何ができるのかを様々な角度から考えてみました。しかし、これに明確な答えを出すことは極めて困難です。しばらく落ち着くことはなからうグローバル化の時代にあつては、各地域が独自のポテンシャルと役割を明確にし、その上で他の地域とどのように協調していくのかを考える必要があります。これまでの西洋一極型システムが終焉を迎えるなかで、日本は世界からの幻想的な憧れを引きつける存在であることをやめ、日本がこれからどうなりたいのかを世界に向けて明確に示す必要があります。それこそが世界が日本に抱く希望であり、日本の今後の課題といえるでしょう。

ウスビ・サコ

京都精華大学 学長。アフリカ系として初めて、日本の大学の学長となる。
マリ共和国生まれ。中国・北京語言大学、南京東南大学を経て来日。2001年より京都精華大学人文学部教員。専門は空間人類学。空間デザインと生活様式の関わりを様々な国で調査。2018年より学長就任。バンバラ語、英語、フランス語、中国語、関西弁を操るマルチリンガル。現在、日本人の妻と2人の息子と京都在住。

嫌で仕方なかった日本語補習校に今は感謝

僕は東京生まれガーナ育ちで日本とガーナのダブルです。2歳半の時、家族で日本からガーナに移住しました。日本人の母が僕に日本語を学ばせた理由は、英語が話せない日本の祖父母と話ができる子供になって欲しかったからだそうです。

ガーナの日本語補習授業校へ

ガーナでは幼稚園から日本語補習校へ通い始めました。補習校は、駐在員や大使館職員などの日本人の子供が駐在中に日本語力を保持し、日本と同じ教科書で学習をする為の学校で、僕のように日本へ帰国する予定もないダブルの子供たちの為に創られた学校ではありません。毎週土曜日、駐在員の子供たちと一緒に勉強しましたが、僕がどんなに頑張っても、僕の日本語は日本人の子と比べると下手でした。特に音読で何度も嫌な思いをしました。なぜ日本に住むつもりもないのに、日本語を勉強しなければいけないのかわかりませんでした。

僕が中学生になった頃、補習校では漢字検定が義務付けられました。漢字検定のせいで補習校も日本語学習も嫌になっていきました。一方、アフリカで生きていく為には、日本語より他の言語を学んだ方が将来の為になると思い始めたのもこの頃です。フランス語を学び、コスタリカの高校へ留学してスペイン語も学びました。補習校をどうにか卒業してから約4年間、僕は日本語学習からずっと離れていました。

日本語との再会

ところがアメリカの大学に進学して、また日本語と再会しました。どのコースを取ろうか迷っていた時、大学3年生レベルの日本語クラスをのぞいてみました。補習校のよう



ボンクジョビ セナさん

- 1995年 東京でガーナ人の父と日本人の母の間に生まれる。
- 1997年 ガーナのアクラに引っ越す。地元の幼稚園、小学校、中学校で学ぶ。
- 2011年 コスタリカのUnited World College高校に進学。
- 2013年 米国のミドルベリー大学に進学。
- 2017年 大学卒業。あしなが育英会でインターンシップ終了後、同会に就職。

な日本人向けの国語のクラスではなく、外国人の為の日本語の授業です。そこで長年アメリカで日本語を教えている日本人の先生に「セナさんの日本語は本当にきれいですね。どこで日本語をこのレベルまで勉強したのですか？」と最初の授業で言われたのです。その時、僕は涙が出そうになりました。今までずっと日本人と比べられ、自分の日本語は下手だと思っていたのに、初めて日本語の先生に、自分の日本語力を褒められたからです。結局そのコースをとることにし、補習校で学んでいたおかげで、漢字も文法も吸収力が早く、授業に出れば出るほど自分に自信がつき、短期で日本語が上達しました。

就職活動をしていた時、日本の「あしな

が育英会」でインターンシップの募集がある事を知り、応募し、合格しました。

あしなが育英会と出会って

あしなが育英会（以下、「あしなが」）は親を失った子供達に奨学金を出す日本の一般財団法人です。5年前よりアフリカ遺児高等教育支援100年構想という事業を始め、アフリカ49カ国から優秀な学生を選び世界の大学へ奨学金で進学させています。日本でアフリカの発展に貢献できるという機会に僕は心を奪われました。インターン生の中にはN1合格者もいる中で、僕の日本語力は評価され、通訳、翻訳、スピーチなどを任されました。僕自身、大勢の人の前で日本語の通訳などできるとは思っていませんでしたが、不思議とできました。日本とアフリカの事をよく理解している僕は、まさに懸け橋になれました。インターン終了後、アメリカへ戻って働く計画でしたが、「あしなが」と出会い、自分の存在価値を改めて考えた結果、日本で暮らそうと決めました。そして僕は今、日本に住み、あしなが育英会で働いています。

子供の頃は嫌で仕方なかった補習校ですが、今やその補習校と、行かせてくれた母に感謝しています。外国にいても日本語を学べる環境は、とてもありがたい事です。さらに、親が日本人だと、日本文化や慣習が身近にあります。それらがあったおかげで、僕は日本での生活に早く溶け込めましたし、アフリカと日本を繋ぐ懸け橋としての仕事をする事ができます。昔は全く自信のなかった日本語が、ダブルの僕が自分の価値を見つけるきっかけになりました。自分の進むべき道がはっきりしてきたような気がしています。



国内編

青森県 八戸市



安心して過ごせる楽しい日本語教室目指して

特定非営利活動法人みちのく国際日本語教育センター (MIJEC)

理事長 馬場亜紀子

海の街 八戸

八戸市は青森県東部に位置し、太平洋に面した漁業の盛んな地域である。市内在住外国人は約 1,200 人で、近隣には米軍三沢基地があり、ショッピングセンターでは外国人が買い物し、外国出身のアイスホッケーの選手も多い。「どさ?」「ゆさ」(津軽弁の「どこへ行くの?」「銭湯に行くよ。」の意)ほどの訛りはないが「南部弁」を話し、朝風呂文化を支える温泉が多く、美しい海岸はまさにインスタ映えスポットとなっている。

日本語教室の始まりと取り組み

八戸市国際交流協会が始めた「日本語教室」は、生徒 5 名程でスタートした。熱意ある取り組みで生徒数が増加し、2003 年には NPO 法人として独立することになった。現在は「火曜日コース」「水曜日コース」「火曜日・水曜日両日コース」の日本語教室に加え、技能実習生の座学、外国につながる児童・生徒の日本語支援事業、日本人向け研修会、防災訓練、地域住民との交流会等、活動範囲は多岐にわたっている。

「日本語教室」は、全部で 8 クラス。18:30 から 20:30 までの 2 時間の授業を年 35 回開催しており、技能実習生、ALT、配偶者、留学生など約 120 名が参加している。ひらがなから始める初級クラスから JLPT N1 取得者が集まる上級クラスまでレベル別に分かれており、継続して学習ができるようになっている。

多くの講師や生徒は仕事が終わってからクラスに駆けつける。講師は生徒が楽しく参加できるよう何時間もかけて準備をする。講師として授業に携わっているのは 17 名だが、2 時間授業ができる講師の人数は限られてい



学期末パーティーでの愉快的な劇



イカ釣り漁船に乗る技能実習生と

る。新人講師はベテラン講師に教案を提出して添削を繰り返す。ここでも時間がかかるが、授業がうまくいき、生徒の笑顔が見られると充実感がある。

初級クラスでは『みんなの日本語』をベースに授業を進めていくが、各クラスのカラーは講師によって様々だ。上級クラスでは JLPT 対策も含めて文法や読解、ディベート等にも取り組んでいる。どのクラスでも、参加した人が気兼ねなく話ができるクラスを目指し、一方的な授業にならないような工夫を常に心掛けていく。この教室が、孤立しがちな外国人にとって、安心して過ごせる楽しい場所になってほしいからだ。

授業以外の交流イベントとして、学期末の「持ち寄りパーティー」やホテルでの忘年会などがある。どちらのイベントにも地域の日本人がたくさん参加してくれ、外国人との交流の場となっている。授業後や週末の生徒たちとの食事の時間も貴重で、一緒に過ごす時間の長さが親密度を増す。生徒たちは生徒同士で旅行に行くほど仲良くなり、中には結婚したカップルもいる。

外国にルーツを持つ子どもの日本語支援

2009 年、青森県では初の取り組みで、学校教育課との協働事業である「外国人児童

支援」が始まった。学校教育課・学校の先生と情報共有し、我々が学校に講師を派遣し、子どもたちを個別に日本語指導する支援である。講師は少しでも早く子どもたちが教室で授業を受けられるよう活動をしている。支援を必要とする児童・生徒の数は年々増加しており、一層の制度の充実が求められている。また市内にとどまらず近隣市町村からも依頼があるので、今後県内全体にも広げていくべき事業だと考えている。

技能実習生へのサポート

造船関係や漁業、水産加工業などに従事する技能実習生については、企業側と情報を共有し、良好な関係を保ちながら日本語座学を進めている。またサクランボや桃狩りのイベントにも多数の実習生の参加があり、職場以外の日本人との交流を楽しめて、新しい体験をすることができて良かったという声が届く。今後もいろいろな企画を考えていきたい。

最近では、昼のクラス開講、翻訳(やさしい日本語)、通訳、コミュニケーションの場の提供など、幅広い支援が私たちに求められている。資金・人手・場所の不足等、問題は山積みだが、一つずつ解決策を探りながらこれからも前進していきたい。



海外編

バングラデシュ ダッカ



バングラデシュの日本語教育を牽引するダッカ大学

ダッカ大学現代言語研究所日本語文化学科

准教授 アラム モハメッド アンサルル

バングラデシュの首都ダッカは世界で最も人口密度が高い都市です。バングラデシュは1971年に独立し、その後、外国語教育が広がり、翌年から日本語教育も導入されています。

日本と友好な外交関係があり、日本語・日本文化に興味を持つ人が多くいます。ダッカ大学現代言語研究所 (Institute for Modern Languages : IML) を中心に日本語教育が行われています。

ダッカ大学 IML の日本語教育

1974年にダッカ大学内で現代言語研究所 (IML) が設立されました。IMLでの日本語教育は、当初、Certificate コースと Diploma コースとして開講されましたが、2017年1月に新たに専攻課程として「日本語文化課程 (Department of Japanese Language and Culture : JLC)」が開設されました。従来の Certificate コースと Diploma コースは、年120時間の日本語のみのコース(4年間)で、卒業時の学生の日本語能力は、日本語能力試験 (JLPT) N4 ~ N3 レベルでしたが、JLC は、4年間の学士課程で、卒業時の日本語能力の到達目標は JLPT N2 以上となっています。また、日本文化・社会に関する基礎的知識を身につけることも重要な目標で、4年間で31科目、計124単位の取得が卒業要件となっています。

31科目の構成は、「日本語科目」以外に、「基礎科目」「地域研究」「文学」「言語学」「理論と応用」の5つの分野からなっています。全体として、日本語学習だけでなく、広く日本社会・日本文化・日本の歴史や政治・経済・地域、さらには日本語教授法や日本語教育研究、日本研究など、総合大学の専攻課程



中間テスト終了後に行う Certificate コースのクラスパーティー。在学中の学生から社会人まで、様々な目的で来日を目指す学習者が集う。右がアラム准教授

にふさわしい内容が盛り込まれています。1、2年目の授業は、日本語能力を育成する科目が中心になっていますが、3、4年目は「地域研究」「文学」「言語学」「理論と応用」の科目が多くを占めています。

日本語人材の育成

国際交流基金の調査や筆者の研究によると、バングラデシュ人日本語学習者の主な学習動機は、「日本への留学」と「日系企業への就職」です。近年、バングラデシュに進出する日系企業が増加し、バングラデシュ国内の日本語学習者が日系企業に就職できる可能性が高くなってきています。また、以前に比べ、留学や就職で訪日する機会も広がっています。バングラデシュは国策として、日本への留学や日本企業への就職が可能な中上級レベルの日本語能力と、日本の文化・習慣・ビジネスマナー等の知識がある人材の育成を推進しています。

近年、IML 内で日本語スピーチ大会、生け花デモンストレーション、日本の政治・社会などについての特別講義なども行われて

います。また、2016年に「バングラデシュ日本語教師会」が設立され、IML は教師会とも積極的に協力し合って様々な活動をしています。

日本語教育における今後の課題

ダッカ大学 IML は、日本語の単純なやりとりから専門的なコミュニケーションの教育を提供しているバングラデシュで唯一の機関です。その IML をはじめとするバングラデシュにおける日本語教育で最も大きな課題が「適切な教材の不足」です。近年初級レベルの学習者の激増もあるため、ベンガル語の訳や説明がついている教材が求められています。最も多くの機関で使用されている『みんなの日本語』ベンガル語の語彙リストや文法解説版が刊行すれば、多くのバングラデシュの学習者に使われることになるでしょう。

今年8月に『みんなの日本語初級 I 第2版 本冊』のベンガル語語彙訳を内部資料としてまとめました。日本国内への発送のみ対応いたします。

教材紹介

『外国人生徒のための教科につなげる日本語 基礎編』

有本昌代 著

B5判 260頁(予定) 2,000円+税 11月発売予定

教科の基本語彙や知識を統合的に学び、教科学習に取り組む力を育てる

有本昌代

本教材は外国にルーツを持つ生徒のための日本語教材です。単に日本語の語彙や表現を学ぶだけでなく抽象概念の理解や考えを深める認知活動も重要な教育の一部です。そこで本教材は日本語学習と教科の基本語彙や知識を統合的に学び、教科学習への橋渡しとすること、さらに考える力、発表する力を育てることを目的としています。

本教材の特長

(1) 複数の教科と日本語学習の統合

本教材のトピックは地理、情報、生物、家庭科、文学、言語、体育、歴史、科学など多岐に渡る教科内容と関連しており、日本語の四技能を総合的に伸ばします。また読み物(本文)は説明文、伝記、物語文、会話文、紹介文、比較文などから成り、様々なジャンルの文章で読む力を育てます。さらに基礎編・応用編・発展編へとステップアップしながら知識やスキルを積み重ね、内容のつながりを深め、視野を広げて学べるように構成しています。今回の基礎編では、自己や日本文化に関する日常的なトピックに焦点を当て、基本的な文型や教科に関連する基本語彙・知識を学習し、「話す・書く」の基本構成を身につけ、調べる、まとめる、発表することを通して自己発信することを学びます。

(2) 日本語・教科学習を通し「学びの力・スキル」を育てる

これからの社会を生き抜くためには、各教科の知識を融合的、総合的に活用させることが重要であると考え、本教材ではその力を「7つの育てたい力」「身につけさせたい7つのスキル」とし、これらの力とスキルを育てることを最終目標とし学習を深めます。

各トピックでスピーチ、ディベート、ディスカッション、ビデオ作りなどの実践的な活動を通し、学んだ知識を活用してアウトプットし、表現力、発表力を養います。生徒たちが主体的に学び、生徒間の交流の機会を作ることができます。

<7つの育てたい力>

- ①文化を創造する
- ②環境問題を考える
- ③人生・生き方を考える
- ④世界に関心を持つ
- ⑤歴史・伝統から学ぶ
- ⑥新しい時代に適応する
- ⑦国境を越えたつながりを知る

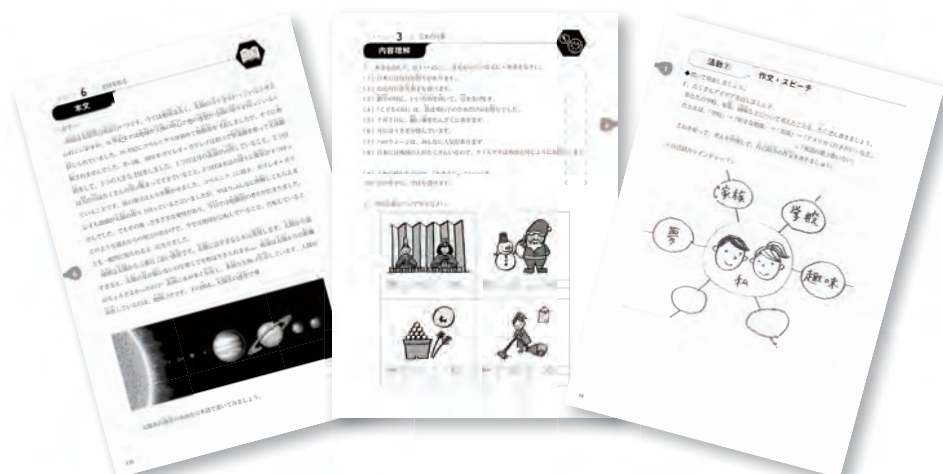
<身につけさせたい7つのスキル>

- ①批判的思考力
- ②経験・歴史・先人から学ぶ力
- ③知識活用能力
- ④問題発見・解決する力
- ⑤想像力・創造力
- ⑥表現力・発信力
- ⑦コミュニケーション力・話し合う力・協調力

各トピックの流れ

- (1) はじめに：トピックに関する既有知識の確認をし、トピックに興味を持たせます。
- (2) リスニング：本文や本文の要約、関連した内容を聞き、単語の聞き取りと概要理解を行います。
- (3) 漢字・言葉学習：関連する言葉カードや絵カードを用いて単語の読みと意味の確認、例文づくりを行います。
- (4) 文法学習：学習した文法を使って正しく文を作れるようにします。
- (5) 本文：本文に関する内容理解と応用的な問題を解かせます。
- (6) 活動：様々な活動を通し、学んだ知識とスキルを融合させ、アウトプットすることで定着させます。

本教材は日本語と教科の語彙や知識を統合的に学び、考える力、発表する力を育成します。本教材での学習を通し、外国にルーツを持つ生徒たちが社会で生き抜く力とスキルを身につけ、さらに日本について広く深く学び理解するきっかけとなること、また将来日本社会や国際社会で活躍し、日本と各国との架け橋になってくれることを願っています。



『日本語文法演習 ことがらの関係を表す表現—複文—改訂版』

小川誉子美・三枝令子 著

B5判 113頁 別冊23頁 1,300円＋税



上級レベルの日本語を適切に産出する

横浜国立大学国際戦略推進機構教授 小川誉子美

専修大学文学部日本語学科特任教授 三枝令子

本書は、2001年に企画された『日本語文法演習シリーズ』の一つで、2004年に刊行した『複文』を改訂したものです。日本語の基本的な構造に関わる文法は初級段階で一通り学びますが、基本的な項目ほどさまざまな用法があり、上級に至っても使い分けがわからないという声がかかります。本シリーズは、初めに文法ルールを示し、それから練習するという流れではなく、まず、問題を解いて学習者が文法上の問題点を意識化し、次に、ルールを導きだし、具体的な用法からルールを確認していくという流れで学習します。本書の最後の総合演習では、生の文章に触れて運用力を確認します。

本書で扱う項目の例を一部ご紹介しましょう。「から」「ので」「て」はそれぞれ理由を表す場合に使いますが、「台風が来るだろうから／*ので、外出はひかえよう」と「から」を使うのに対し、「電車が遅れ

て／*たんですから、遅刻してしまいました。すみません」の場合は使えないのはなぜか、「市場へ行ったら、知り合いの魚屋が休みだった」とは言えるのに「市場へ行って、知り合いの魚屋が休みだった」はなぜ言えないのか、「厳しい環境で合格できてすごいですね」に対し「厳しい環境だったからこそ目標が持てたんです」の「からこそ」の使い方は自然だが、「頑張ったからこそ合格できたんです」が不自然なのはなぜか、そのほか、「ときに」と「ときは」、「なら」と「は」、「場合」と「なら」の違いなど、学習者の誤用から気づいた知見を項目に生かしています。

改訂版では、二つの文をつなぐだけでなく、「人口が減った⇒税収が減少した⇒税率を上げた」といった三つ以上の文のつながり方も積極的に取り上げました。これは節と節の関係やその結びつきの強さを考えるのに効果的です。総合演習では、こうした複数の節を結びつける練習を多く取り入れています。

日本語学習者だけではなく、文法説明の方法に関心がある方、指導する立場の方にも使用していただけるテキストです。

『小説 ミラーさん II—みんなの日本語初級シリーズ—』

横山悠太 著

A5変判 153頁 1,000円＋税



小説ミラーさん、ふたたび！

作家 日本語教師 横山悠太

初級の日本語レベルでも読める読み物があればいいのに、という思いから、『みんなの日本語』の登場人物であるマイク・ミラーさんを主人公にした『小説ミラーさん』という本を2年前に出版しました。読者からは「初めて日本語の小説を読み切ることができて、自分の日本語力に自信がついた!」といった声など、おかげさまで多くの反響をいただきました。

そういうわけで、きっと多くの読者が続編を期待してくれている(?)と思われるので、少し時間が空いてしまいましたが、この度その続編となる『小説ミラーさんII』を書き上げました。

今作はミラーさんが大阪から東京へ引っ越してくるところから始まります。前作同様、『みんなの日本語 本冊』の会話や例文、練習、問題などの内容が反映されていますので、本冊の内容と照らし合わ

せながら読むと、より楽しめると思います。ミラーさんが同僚の鈴木さんとかっぱ橋へ出かけたり、両国へ相撲を見に行ったりと、オリジナルのエピソードも満載です。私が個人的に気に入っているのは、第8話の「課長の欠勤」です。

前作は初級文法に制限して書きましたが、今作は使用する文法を初中級（日本語能力試験N3）レベルまで広げてみました。読み応えを重視して、一話一話の長さも前作より若干長めにしました。

読者は初級から中級へ移行中の学習者あたりを想定していますが、初級後半の学習者であっても、少し背伸びをすれば、だいたい理解できる程度ではないかと思います。

初級や中級の学習者は、まだまだ日本語で読書しようとは思えないかもしれませんが、読書の楽しみが学習をリードするという形は、これから見直されてもよいのではないかと考えています。

この連作が、学習者が日本語で読書をするようになるきっかけになればと願っています。



なんでも情報 BOX

Books ほん

すべて本体価格です

- 小説 ミラーさん II—みんなの日本語初級シリーズ— 1,000 円 + 税 10 月発行
 中学生のにほんご 社会生活編 —外国につながるのある生徒のための日本語—
 2,000 円 + 税 11 月発行予定
 外国人生徒のための教科につなげる日本語 基礎編 2,000 円 + 税 11 月発行予定

Information

お知らせ

《白い杖の留学生 国際大会～過去から未来へ～》

日本の盲学校で学び、自立して頑張っている元留学生が 9 カ国から来日します。これまでの活動を共有し、未来の国際交流を考えます。どなたでも無料でご参加いただけます。参加のお申込み、詳細については、協会 (IAVI) までご連絡ください。

日時：11 月 30 日 (土) 8 時 30 分開場

9:10-11:50 各国からの報告①

11:50-13:20 展示会・交流タイム (昼食)

13:20-14:20 基調講演

「日本の視覚障害者の現状と海外の視覚障害者と共に歩むことの意味」

講師：指田忠司氏 (日本盲人福祉委員会常務理事)

14:30-16:30 各国からの報告②、留学生からの報告、IAVI からの提案

会場：アルカディア市ヶ谷 (東京都千代田区九段北 4-2-25)

主催：社会福祉法人 国際視覚障害者援護協会 (IAVI)
TEL : 03-5392-4002 E-mail : info@iavi.jp

共催：日本盲人福祉委員会、一校のゆめ財団

後援：日本視覚障害者団体連合、毎日新聞社「点字毎日」、全国盲学校長会、日本理療科教員連盟

ウェブマガジン「3A Plus」をオープンしました！

日本語教育や英語試験対策・勉強法などのコラムなどを紹介するウェブマガジンを始めました。日本語学校の先生方や著者に教材の具体的な活用例をご紹介いただく「特別連載 日本語教科書活用講座」や、Ja-Net のバックナンバーもご覧いただけます。これから様々なコンテンツを増やしていく予定です。
http://plus.3anet.co.jp/

Seminars

セミナー

『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 56 中級前期 第 2 版』改訂のポイントと具体的な指導の方法 (名古屋会場)

講師：平井悦子、三輪さち子 (『中級へ行こう』『中級を学ぼう』シリーズ著者)

日時：12 月 22 日 (日) 14:00-16:00 (受付開始 13:30)

会場：ウインクあいち 会議室 1103 (愛知県名古屋市中村区名駅 4 丁目 4-38 愛知県産業労働センター)

対象：日本語学校、専門学校、大学で日本語を教えていらっしゃる方
 定員：90 名
 参加費：無料
 主催：スリーエーネットワーク



申込み 11 月 1 日 (金) 11 時より

【ウェブサイト】http://bit.ly/2meUWfU

【ハガキ・FAX】スリーエーネットワーク講座係
FAX : 03-5275-2729

〒102-0083 東京都千代田区麹町 3-4 トラスト麹町ビル 2F

※お申込み時、セミナー名・お名前・ご所属・お電話番号・日本語教授歴を明記してください。

※ハガキ、FAX の場合、3 営業日以内に受付の連絡がないときは講座係までご連絡ください。

問合せ スリーエーネットワーク講座係
TEL : 03-5275-2722

九州日本語教育連絡協議会 2019 年度 12 月研修会

外国につながるのある生徒のための日本語支援のあり方について

～『中学生のにほんご』を例として～

講師：志村ゆかり (関西学院大学日本語教育センター日本語常勤講師)

日時：12 月 7 日 (土) 13:00-16:30 (受付開始 12:30)

会場：福岡女子大学 講義棟 C101 (小ホール)
(福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1)

定員：70 名 (先着順。定員になり次第締切)

参加費：1,000 円 (資料代として。当日受付でお支払いください)

主催：九州日本語教育連絡協議会

共催：スリーエーネットワーク



申込み

【ウェブサイト】

https://kokucheese.com/event/index/576751/

問合せ 九日連事務局

【E メール】：kyunichiren1989@gmail.com

地域で活動する日本語ボランティアのための交流研修会 in 新宿

研修会 1 「教科書を「探す・選ぶ・活用する」

講師：田中祐輔 (東洋大学国際教育センター 准教授)

研修会 2 「「聞く」協力」からはじまる外国人との

日本語会話

講師：深江新太郎 (文化庁委嘱日本語教育施策アドバイザー、学校法人愛和学園 愛和外語学院 教務長)

研修会 3 「外国につながるのある生徒のための日本語支援のあり方について」

講師：志村ゆかり (関西学院大学日本語教育センター日本語常勤講師)

日時：2020 年 2 月 15 日 (土) 13:30-17:25

(受付開始 13:00)

会場：新宿文化センター 3 階小ホール (東京都新宿区新宿 6-14-1)

定員：200 名 (先着順。定員になり次第締切)

参加費：無料

主催：公益財団法人 新宿未来創造財団

協力：アルク、スリーエーネットワーク、凡人社

申込み 11 月 20 日 (水) より

【E メール】chiiki@regasu-shinjuku.or.jp

【郵送】公益財団法人 新宿未来創造財団 地域交流課

〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-1-2 新宿コズミックセンター 1 階

※お申込み時、お名前・お電話番号・活動グループ名を明記してください。

問合せ 公益財団法人 新宿未来創造財団

地域交流課 TEL : 03-3232-5121 または E メール

Ja-Net No. 91

季刊ジャネット

スリーエーネットワークという社名は、アジア (Asia)、アフリカ (Africa)、ラテン・アメリカ (Latin America) の三つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2019 年 10 月 25 日発行

●発行人 藤崎政子

●発行所 (株) スリーエーネットワーク

Ja-Net 編集室

〒102-0083 東京都千代田区麹町 3-4

トラスト麹町ビル 2F

TEL : 03-5275-2722 FAX : 03-5275-2729

E-mail : sales@3anet.co.jp

https://www.3anet.co.jp/

●印刷 (株) ワコー

© 2019 by 3A Corporation Printed in Japan

(禁無断転載)

●『Ja-Net』をご希望の方はお名前・ご住所・ご所属を編集室までお知らせください。無料でお送りいたします。『Ja-Net』第 92 号は 2020 年 1 月 25 日発行予定です。